

上田さんが出版した『春日』の句集には、何気ない日常の心温まるシーンが詠まれています



点字図書に点訳する人のこと、上小谷に住む上田春日さんもその一人。指導員の資格も持っています。今から32年前、益城町役場を35歳で退職した上田さんは、新聞に掲載されていた点訳ボランティア活動に目を留めました。それをきっかけに熊本市東区の国道道路沿いにある「熊本県点字図書館」で、点字ボランティア講座“を受け、以来長年にわたり点訳ボランティアとして活動しています。

上田さんたちが翻訳する点字図書は、真っ白なページに突起した無数の点字が並べられています。上田さんは「点訳では作品へ感情移入しないことが鉄則。一語一句を記号として認識することが大切なんです」と話します。

その一方で実は上田さんは、日々の営みや思い、四季の移ろいを感じる



気さくで明るくて、思いやりの深い人柄の上田さん

情豊かに表現する俳人でもありません。父親で俳人の、今年99歳になる富永橘郎さんの影響で、若い頃から俳句に親しんできました。ちなみに上田さんの名前の「春日」は、初冬の穏やかな小春日和の日に生まれたことが由来だそうです。そして上田さんは、『春日』というタイトルの句集も出版しています。

「お元日 かしこまる子の 膝の傷」

上田さんが『春日』の句集の中で好きだというこの句には、日々外で夢中になって遊ぶ子どもらの、正月の改まった席でのほほ笑ましい姿が表現されています。

防災公園に響く 元気な子どもたちの声

土曜日の午後、下小谷にある防災公園は、地域の子どもたちの交流の場になっています。元気な声に引き寄せられてのぞいてみると、

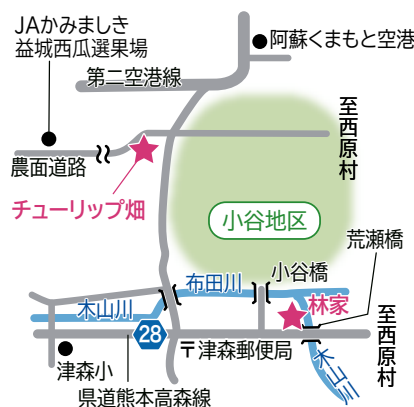


防災公園で遊んでいた子どもたち。どの子ども元気がいっぱいです

総勢12人の子どもたちが元気に走り回っています。小谷地区はもとより杉堂や堂園地区からやって来た子どもたちもおおり、保護者が付き添い見守っていました。

その中に一昨年3月号の小谷地区の散歩で出会い、きょうだいでスイカを抱いた姿で表紙を飾ってくれた、渡邊然君と弟の京君の顔もありました。あの時幼かった2人も約2年もたつと少年の顔。その成長の早さに驚くばかりです。

※12月号の「わがまち散歩福田編」で紹介した安尾澄子さんの書の作品名に間違いがありました。訂正してお詫びいたします。



散歩の終わりに

冬の夕暮れは早く、防災公園で戯れる子どもたちも「まだ遊び足りない」といった感じです。そこで上田春日さんの最近の句をご紹介します。

「冬夕焼け 帰りたくなき子が二人」

子どもの上着を手に、孫娘を公園に迎えに行った時のことを詠んだのでしょうか。深い愛が伝わる一句です。